

ントに、
一〇〇度
った装置
に五〇度
。加水に
めること
す時間も
深夜営業
う。こと
される予



いい湯加減

装置は「ひょうたん温泉」に空気に触れ、蒸発す
泉」を運営するユースで熱を奪われ一
ト（河野純一社長）と県 気に温度が下がるとい
産業科学技術センターう。

（大分市）、県竹工芸・ ひょうたん温泉では午
訓練支援センター（別府 後九時の営業終了後、午
市）の三者が共同研究で 前八時の営業開始前まで
開発した。 約十時間かけて湯を冷ま

冷却装置は高さ三・五 して適温にしていた。湯
が。ポンプで源泉から湯 温の下がりにくい夏場は
をくみ上げ、天井部のV 加水して調節。適温にす
字形の切れ目を付けた木 るまでに毎日、膨大な時
の樋（とい）からあふれ 間がかかる上、「源泉掛
出た湯が、竹の枝を伝 け流し」ができない時
て流れ落ちる仕組み。湯 季もあり、頭を悩めてい
は枝を伝って落ちる間 た。

加水の必要なし 源泉だけ提供

輪の風景になじまない」
などの理由で、天然素材
の竹に着目。装置は、兵
庫県赤穂市にある昔なが
らの「流下式塩田」をヒ
ントにした。

豊田修身主幹研究員
（県竹工芸・訓練支援セ
ンター）、斉藤雅樹主任
研究員（県産業科学技術
センター）は「この装置
を使えば、湯の成分を浴
槽まで、ほとんど損なう
ことはない。加水に悩む
ほかの施設にも利用でき
るのではないかと期待。
河野社長は「水で薄め
ない源泉の提供は長年の
夢だった。温泉資源の有
効活用にもなる」と話し
ている。

別府「ひょうたん温泉」冷却装置を開発

湯・鉄輪
舗温泉施
産のモウ
を使った
を具の支
実用新案
昔ながら



県産のモウソウチクを
使った「温泉冷却装
置」。夏場でも一気に
50度程度まで冷ませ

「源泉にこだわりたい」
という同社の思いを受
け、共同研究は昨年春に
スタート。熱交換器など
機械を使って冷却する方
法もあるが、「温泉によ
って腐食しやすい」「鉄